

LEONARD BERNSTEIN

THE LOVE OF THREE ORCHESTRAS

わたしの愛するオーケストラ

CHAPTER

- | | |
|-----------------------|---------|
| 1 わたしの愛するオーケストラ～プロローグ | [03:03] |
| 2 指揮者デビュー時代 | [08:17] |
| 3 イスラエル・フィル時代 | [17:01] |
| 4 ニューヨーク・フィル時代 | [17:12] |
| 5 ウィーン・フィル時代1 | [15:49] |
| 6 ウィーン・フィル時代2 | [19:45] |
| 7 エピローグ | [07:26] |

収録曲(すべて抜粋)

マーラー:交響曲第5番 第4楽章(アダージェット)***
ブラームス:交響曲第3番 第1楽章*
チャイコフスキー:交響曲第4番 第4楽章**
R. シュトラウス:ドン・キホーテ**
チャイコフスキー:ロミオとジュリエット*
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第1番***
モーツァルト:ピアノ協奏曲 K. 453 第3楽章***
マーラー:子供の不思議な角笛*
ブラームス:交響曲第1番 第4楽章*
バーンスタイン:キャンディード序曲**
ガーシュイン:パリのアメリカ人**
チャイコフスキー:"アンダンテ・カンタービレ"弦楽四重奏曲 第1番より**
チャイコフスキー:交響曲第4番 第1楽章**
ベートーヴェン:交響曲第6番"田園"第4楽章(嵐)***
マーラー:交響曲第9番***
ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 作品131、第5楽章***
モーツァルト:交響曲第39番 第2楽章***
ハイドン:交響曲第88番 第4楽章***
モーツァルト:ピアノ協奏曲第17番 第3楽章***
ブラームス:交響曲第1番 第4楽章*
モーツァルト:交響曲第39番 第4楽章***

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団*

ニューヨーク・フィルハーモニック**

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団***

指揮: レナード・バーンスタイン

監督: ハンフリー・バートン

制作: 1986年 ユニテル

Israel Philharmonic Orchestra*

New York Philharmonic**

Vienna Philharmonic Orchestra***

Leonard Bernstein

Humphrey Burton

■解説

林田直樹

本DVDは、20世紀を代表する音楽家レナード・バーンスタインが、自らの指揮者としてのキャリアと音楽観を、生涯の間に関わった最も重要な3つのオーケストラを対象にしつつ、自在に語り尽くした貴重なインタビュー映像である。

本編を見ると、バーンスタインの熱弁とともに、演奏シーンのダイジェストがタイミングよく挿入される。指揮者バーンスタインの全体像を理解する上で大変よくまとめられた映像記録である。

これを観ると、改めてバーンスタインは火のような存在であったとつくづく思う。彼が語っている姿を見るだけでも、そのオーラによってこちらは抗いようもなく虜になるし、吸い寄せられる。全人的に、強烈な磁場がある音楽家なのだ。それが映像によって蘇ってくるのが、本編の最大の価値だろう。とにかく、彼の内面にあかあかと燃えている音楽の火が、周囲にある人々を動かし、偶然を引き寄せ、あらゆる事柄を動かしたのだ――。

バーンスタインが急病のブルーノ・ワルターの後継者としてニューヨーク・フィルにデビューしたときの逸話は、あまりにも有名である。が、本人の口から語られるとさすがにインパクトは大きい。いまでも、当たり前のように思われているが、当時はバーンスタインが「コーヒーに何か仕込んだ」などと中傷の対象になるほどで、やはり事態はそう簡単ではなかったらしい。本番の直前に、親切な薬剤師からもらった違法な薬物を大きく投げ捨てたというくだりも心を打つ。このあたりの率直な回顧も、この映像の面白さの一つだ。

ニューヨーク・フィルの真髄は、フレキシビリティと柔軟性にあり、それがアメリカの本質でもあるというバーンスタインの指摘もまた、見事である。バーンスタインの言葉は常に、このように的確に、物事の本質を大きくつかみ、鋭く突く。情熱的であるだけでなく、極めて知的に磨かれた芸術家でなければならぬ洞察力が、ここにはある。その衝撃は、彼の音楽のあり方とも根底で通じている。

イスラエル・フィルについてのバーンスタインの意見も深い。それはさまざまな国から集まってきた人々によって結成されたこのオーケストラが、イスラエルという国家の本質といかに密接につながっているかを立証する。イスラエルは1948年の建国以来、「ずっと戦争状態にある」国家なのだ。パレスチナ側からすれば迷惑な話だろうが、逆にイスラエル側からすれば、国家を維持することは、死に物狂いの努力によってようやく保たれることなのだ。音楽もしかり。イスラエルにおいて音楽とは、あやうい状況の中にあつて、命がけで選びとられる大切な何ものかである。それが、イスラエル・フィルの原点なのかもしれない。

ウィーン・フィルとバーンスタインの出会い、おそらく20世紀音楽史上最も重要な事



発売・販売: ニッポン音楽株式会社 ドリムライフ事業部

〒105-0013 東京都港区浜松町1-7-3 第一ビル2F TEL 03-3578-6930 FAX 03-3578-6851

件の一つである。その証言が、ここではリアルになされている。ここは本映像のハイライトとも言うべき個所だ。

いまでもマーラーの音楽を私たちは当然のように享受しているが、バーンスタインがウィーンにきた頃は全くそういう状況ではなかった。ウィーン・フィルは最初、マーラーを演奏することに対して強烈な抵抗をしたのである。リハーサル最中に「なんてひどい音楽」という言葉が聴こえてきたというバーンスタインの回想は生々しい。

マーラーがユダヤ人だったということもあり、ナチスの影響下にあった時代では演奏は禁じられ、いつしかマーラーの音楽は忘れ去られていった。それを蘇らせたのがバーンスタインだった。このことはいまもウィーン・フィルの多くの団員が証言するところである。

それにしても、ウィーン・フィル伝説のコンサートマスター、ゲアハルト・ヘッツェルの鬼神と化したかのような勇姿には瞠目させられる。何という激しい弾きっぷりだろう。このときヘッツェルをはじめウィーン・フィル楽員の多くが、バーンスタインに心底魅せられ、心に宿る火をしかと受け取り、マーラーやブラームスやベートーヴェンの音楽とともに、熱烈な体験を味わっていたであろうことは想像に難くない。最近のウィーン・フィルはかなり世代交代も進んでいるが、それでも何割かの楽員たちは、あたかも音楽上の息子たちのように、いまもバーンスタインを偲び続けている（ゆえに彼らは毎年札幌にやってきて、バーンスタインが創設したPMF＝パシフィック・ミュージック・フェスティバルのために尽くすのだ）。その事実はずっと知られてもいい。

この映像でもバーンスタインの口からもれていることだが、バーンスタインは、オケのメンバーと個人的な関係を結ぶことを躊躇しない人だった。幾度も「家族」という言葉が出てくるのがそれだ。バーンスタインはいくらでも楽員の相談に乗ってやり、音楽のことはもとより、プライベートな悩みを聞き、果ては金に困っている楽員には金を貸すこともまですした。

本来マエストロとはおそらくそういうものではない。楽員たちからは距離を保ちつつ、敬意をもって遇されるのがマエストロなのだ（内心はどうあれ）。

ところがバーンスタインのオーケストラ観は違う。100人の楽員とあたかも熱烈なセックスするかのように、一緒に音楽の愛の波に乗り、官能的な体験をする。オケをそういうパートナーとみなしていたのだ。

ことによると、バーンスタインの登場以来、指揮というものは変わったのかもしれない。つまり、熱狂的な司祭のようにふるまうことが、多くのマエストロたちの傾向として伝染していったのではないだろうか。その源流はおそらくバーンスタインなのだ。

ただ、見掛けだけを真似しても決してバーンスタインにはなれない。バーンスタインの棒のテクニクはそれほど巧いというわけでもなかったということは、私も多くの音楽家たちから聞いた。それはおそらく本当だろう。そのかわり、バーンスタインには作曲家としての豊富な知恵と経験があり、音楽だけのスペシャリストとは違う、もっと包括的な知性と人間性への信念があった。

この映像でバーンスタインは、「教えるのが大好きだが、人が学んでいるのを見るのはもっと好きだ」と語っている。これも起爆力を持った言葉である。バーンスタインが何に突

き動かされていたかがわかってくる。おそらくバーンスタインにとって、美しく魅力的な人間とは、柔軟に学ぶ人間のことなのだ。既知のテリトリーの殻に閉じこもる人間ではなく、「外部」に対して耳も目も心も開かれた人間こそ、バーンスタインの好むところなのだ。ウィーン・フィルの楽員たちから聞いた話では、ウィーンにやってきたばかりのバーンスタインは、全身をアンテナのようにして、あらゆることを感じ取り、学んでいたのだという。バーンスタインはマーラーをウィーン・フィルに再発見させたかもしれないが、われわれもバーンスタインに多くのことを教えたと思う、とある楽員は語ってくれた。それは本当だろう。ウィーンで学びとった事柄が、さらに晩年のバーンスタインの音楽に深みを与えたのは間違いのないところだと思う。

さらなる見どころとしては、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調作品131の弦楽合奏版を演奏したときのエピソードを語っているあたりだ。ウィーン・フィルとのこの録音は、新譜で出てきたときのことを筆者もよく覚えている。それまでの熱狂的なイメージのバーンスタインが、ウィーン・フィルとの共同作業によって、一段とその芸風に深みを加えた、あれは決定的な名盤だと信じていたので、バーンスタインがあれをこれほどまでに自賛しているのは、まったく同感で、我が意を得た思いである。

このときも、バーンスタインはウィーン・フィルから強い抵抗を受けたと本編映像では述べている。「弦楽四重奏であれだけ難しいものを、オーケストラでできるわけがない」というわけだ。しかし、バーンスタインは確信をもってやり遂げた。結果、ウィーン・フィルはあれほどの名演奏をなしとげることができたのだ。

ここにはひとつの教訓をみてとることもできよう。つまり、オーケストラとは常に新奇なことには抵抗するものなのだ。いわばスペシャリスト集団である彼らは、それまでの経験と常識に基づいて、指揮者の持ちだす新しいアイディアや試みをしばしば拒否する。それは彼らが愚かだということを意味するわけではない。オーケストラとはそういうものなのだ。綱で無理やり引っ張ろうとすれば抵抗する巨獣のようなものだ。しかしその気になれば火の輪を華麗にくぐる潜在力は持っているというわけだ。

バーンスタインは新しいことに挑戦することを決して恐れない人だった。ニューヨーク・フィルのくんだりでも述べているが、彼の持ちだす曲目の多くが世界初演曲だったこともあるという。常に評価の定まった名曲ばかりを繰り返し演奏していたのではない。前衛にも果敢に取り組み、開拓者精神を忘れなかった。それは、評価の定まった作品においても、チャレンジするという姿勢は常に変わらなかったことを意味する。そのことも忘れてはならないだろう。

この映像の最後のクレジットには、バーンスタインの長年のマネージャーを務め、ベルリンの壁が崩壊したときの「第9」のプロデューサーなども行い、タンゲルウッド音楽祭についても多くを知りぬき、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）の継続にも力を尽くした傑物ハリー・クラウトの名前も記されている。

バーンスタインの生前、懐刀ハリー・クラウトの威光にはささじいものがあつたという。バーンスタインについてあらゆることを知りぬいていたといってもいい。そのハリーもいまは亡き人となってしまったが、筆者がハリーにあるときこんな質問をしたことがある。

——バーンスタインがもし生きていたら、ブッシュのアメリカがフセインのイラクに仕掛けた湾岸戦争について、どんな態度を表明したと思うか?と。

ハリーの答えは明確だった。「レニーは湾岸戦争だろうが何だろうが、あらゆる戦争には絶対にノーと言ったはずだ」と。

このDVDではあまり語られていない要素だが、バーンスタインはただの優れた演奏をする音楽家というだけではなかった。音楽家である以前に、強い信念と良識ある人間として行動する人だったということを忘れてはならない。世界の平和と人類の未来のために何ができるか。そういう思想と、たとえばベートーヴェンやマーラーを演奏することが、分かちがたく結びついている人物であった。

バーンスタインは徹底的にリベラルな人間であった。あらゆる差別に敏感に反応したし、たとえ合衆国政府を敵に回そうともひとり戦争に反対することのできる人間であった。本来は北京で開催されるはずだったPMFを撤回し、札幌開催としたのも、民衆を蹂躪した天安門事件の中国共産党政府に対して鋭く反発したからである。

そうしたバーンスタインの思想的態度に、ニューヨーク・フィルもイスラエル・フィルもウィーン・フィルも、心から共感を寄せていたに違いないと私は思う。

本映像「わたしの愛するオーケストラ」に付け加えておきたいのはそのことである。

■イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団

(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団公式サイトより)

1936年、ヴァイオリニストのプロニスワフ・フーベルマンの呼びかけで、ヨーロッパ各地で政治的理由により解雇されたユダヤ人音楽家が集まって創設されたパレスチナ管弦楽団が前身。初演奏会はテル＝アヴィヴでアルトゥーロ・トスカニーニを招いて開かれた。1948年のイスラエル国建国に伴って名称をイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団に変更。同年のイスラエル建国記念式典ではイスラエル国歌を演奏した。1950年、初の海外演奏旅行をアメリカ合衆国で行い、クーセヴィツキー、バーンスタインと共演。この演奏旅行は、アメリカ在住のユダヤ人に大きな誇りを感じさせるものだった。その後、ヨーロッパ、アジアでも頻繁に海外公演を行い、1971年にはザルツブルク、エディンバラなどヨーロッパの著名な音楽祭に招聘された。現在ではベルリン・フィルやウィーン・フィルと並び称されるほどの世界的名声を得ている。特に結成当時以来の伝統で厚みのある弦楽器の響きは「世界一の弦」と称される。レパートリーは多岐に渡るが、特にベートーヴェン、モーツァルト、メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキー、マーラー等を得意とする。ワーグナーはナチス・ドイツの文化的象徴ゆえに、現在でも例外を除いて演奏されることはない。今までに世界的な音楽家との共演は数多く、指揮者ではトスカニーニ、ジュリーニ、クーセヴィツキー、ショルティ、オーマンディ、バーンスタイン、マゼール、バレンボイム、メータ、ムーティ、ナガノ、ゲルギエフ、ドグダメル等、ソリストではハイフェッツ、パールマン、ヅッカーマン、ルービンシュテイン、ゲールド等。特にバーンスタインからの信頼は厚く、共演の録音、映像も多い。1968年からズビン・メータが終身音楽監督を務めている。

■ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

山田治生

1842年、ウィーン宮廷歌劇場のメンバーが集まり、オットー・ニコライの指揮の下にひらかれた「フィルハーモニック・アカデミー」のコンサートが起源。1860年に定期演奏会を開始した。その後、ハンス・リヒター、グスタフ・マーラー、フェリックス・ワインガルトナー、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、クレメンス・クラウスなどがウィーン・フィルの指揮者を務めた。1933年以降は、専任指揮者を置かず、客演指揮者制をとっている。現在は、ウィーン国立歌劇場の精鋭メンバーによる自主運営オーケストラとして、定期演奏会のほか、「ニューイヤーズ・コンサート」などの特別演奏会をひらき、ザルツブルク音楽祭ではホスト・オーケストラの役割を果たしている。また、海外演奏旅行やレコーディングも積極的に行っている。カール・ベームとヘルベルト・フォン・カラヤンが名誉指揮者の称号を受け、レナード・バーンスタイン、リッカルド・ムーティ、ズビン・メータが名誉会員となっている。ルド・ムーティ、ズビン・メータが名誉会員となっている。

■ニューヨーク・フィルハーモニック

創立はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と同じ1842年で、この年の4月に「フィルハーモニック・ソサエティ・オブ・ニューヨーク」が設立され、同年12月7日にユーレリ・コレリ・ヒルの指揮のもとで初めてのコンサートが開かれた。1909年にグスタフ・マーラーを常任に迎え、演奏レヴェルの向上に努め、楽団員をフルタイムの団員とした。第一次世界大戦中の1917年10月にはレコード録音も始まっている。1928年3月20日には最大のライバルであったニューヨーク交響楽団を吸収した。これによって名称はニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団となった。1943年11月14日には、当時副指揮者だったレナード・バーンスタインが、ブルーノ・ワルターの後任としてニューヨーク・フィルに伝説的なデビューを飾った。その後1958年、低迷する名門を救うべしという世論に応えるように、バーンスタインがアメリカ人で初めてニューヨーク・フィルの音楽監督となった。彼はコンサートの回数を増やし、楽員の雇用形態も安定させ、レコーディングも積極的におこなった。バーンスタイン時代に、楽団の正式名称もニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団からニューヨーク・フィルハーモニックへと改められた。バーンスタインの華麗な指揮と明快な音楽解釈、そして何より豊かな音楽的才能は、この誇り高き扱いにくいオーケストラの楽員たちを瞬く間に手なずけた。彼のスター性と相まって、バーンスタインとニューヨーク・フィルとのコンビによるレコーディングやテレビ放送にも注目が集まり、ニューヨーク・フィルの黄金時代が到来した。1961年には本拠地をリンカーン・センター内のエイヴリー・フィッシャー・ホール（開場当時の名称はフィルハーモニー・ホール）に移した。

バーンスタインは1969年に音楽監督を退いた後も、桂冠指揮者としてこのオー

ケストラと密接な関係を保ち、最晩年まで演奏会での共演やレコーディングを重ねた。1960年代に完成させたマーラーの交響曲全集（一部別のオケ）は、世界最初の偉業である。その他、ベートーヴェン、シューマン、ブラームス、チャイコフスキー、シベリウスの交響曲全集と、モーツァルト、ハイドン、メンデルスゾーン、シューベルト、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチの主要交響曲を録音し、管弦楽作品と協奏曲もバロックや古典から現代曲まで、膨大な数のレコーディングを残した。

2002年の9月からはバーンスタイン以来2人目のアメリカ人指揮者としてロリン・マゼールが音楽監督を務めている。マゼールの音楽監督時代になってからは、前任者マズアがアンサンブルを鍛え直した成果もあって、すっかりした細身のアンサンブルながら、かつての輝かしい音色を取り戻しつつあり、評価は再び高まりつつある。特に首席トランペット奏者フィリップ・スミスと首席トロンボーン奏者ジョゼフ・アレッシのコンビは、世界でも一、二を争う名手の組み合わせである。木管セクションも世代交代をほぼ終えて音色が若返り、コンサートマスターには1980年以来、名手グレム・ディクテロウが座っている。2007年7月、アラン・ギルバートが2009年秋より音楽監督に就任すると発表された。

■レナード・バーンスタイン

山田治生

指揮者、作曲家、ピアニスト、教育者、平和運動家として活躍した20世紀を代表する「音楽家」。1918年8月25日、マサチューセッツ州ローレンス生まれ。ハーヴァード大学を卒業した後、カーティス音楽院でフリッツ・ライナーに指揮を師事。

1943年11月、急病のワルターの代役でニューヨーク・フィルを指揮し、センセーショナルなデビューを飾る。1945年から48年までニューヨーク・シティ交響楽団の音楽監督を務める。1957年、ディミトリ・ミトロプーロスとともにニューヨーク・フィルの首席指揮者となり、1958年からは単独でニューヨーク・フィルの音楽監督となる。1966年、「ファルスタッフ」を指揮してウィーン国立歌劇場にデビュー。1969年にニューヨーク・フィルの音楽監督を離任。以後、フリーランスの指揮者として、ウィーン・フィル、イスラエル・フィル、コンセルトヘボウ管弦楽団、ニューヨーク・フィル、ロンドン交響楽団、フランス国立管弦楽団、聖チェチーリア国立音楽院管弦楽団などを指揮。

晩年は教育活動に熱心に携わり、タングルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ・ホルンスタイン音楽祭で若い音楽家を指導。1990年には札幌でパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）を創設する。

1990年10月14日、ニューヨークにて死去。

バーンスタイン世界初映像作品がDVDで続々登場！

好評発売中！ ドキュメント

●与えるよこび -The Last Date in Sapporo 1990

1990年夏、札幌での第1回パシフィック・ミュージック・フェスティバルのドキュメント
DLVC-1213 ¥3,570（税込） カラー／ステレオ／58分

好評発売中！ コンサート+コミック・ブックレット

●バーンスタイン+手塚治虫/雨のコンダクター -ハイドン：戦時のミサより 手塚治虫がバーンスタインを主人公に描いた漫画「雨のコンダクター」とその漫画の元になった「バーンスタイン指揮/ハイドン：戦時のミサ」が収録されているDVDをセットにした話題作

DLVC-1214 ¥3,780（税込） カラー／ステレオ／56分

好評発売中！ コンサート

●ハイドン：交響曲 第92番 ト長調 「オックスフォード」

●ハイドン：交響曲 第94番 ト長調 「驚愕」

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
○ボーナストラック：クリスタ・ルードヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／バーンスタイン（ピアノ伴奏）
DLVC-1215 ¥3,360（税込） カラー／ステレオ／71分

好評発売中！ コンサート

●ハイドン：交響曲 第88番 ト長調 「V字」

●ハイドン：協奏交響曲 変ロ長調

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
○ボーナストラック：クリスタ・ルードヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／バーンスタイン（ピアノ伴奏）
DLVC-1216 ¥3,360（税込） カラー／ステレオ／67分

好評発売中！ コンサート

●ハイドン：交響曲 第97番 ハ長調

●ハイドン：交響曲 第98番 変ロ長調

演奏：ニューヨーク・フィルハーモニック
DLVC-1217 ¥3,360（税込） カラー／ステレオ／59分

好評発売中！ コンサート

●ベルリオーズ：イタリアのハロルド

演奏：フランス国立管弦楽団 ソリスト：Donald Mackinnon（ヴィオラ）
○ボーナストラック：クリスタ・ルードヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／バーンスタイン（ピアノ伴奏）
DLVC-1219 ¥3,360（税込） カラー／ステレオ／67分

2010年12月24日発売 コンサート

●ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第16番 へ長調 作品135

●ウェバー：オイリアンテ序曲 作品81

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
○ボーナストラック：クリスタ・ルードヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／バーンスタイン（ピアノ伴奏）
DLVC-1220 ¥3,570（税込） カラー／ステレオ／約46分

2011年1月26日発売 ドキュメント

●アナリーゼ -シューマンの交響曲

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
○ボーナストラック：クリスタ・ルードヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／
ダニエル・ベンジャミン（ヴィオラ）／バーンスタイン（ピアノ伴奏）
DLVC-1221 ¥4,620（税込） カラー／ステレオ／約73分

2011年2月25日発売 コンサート

●ロメオとジュリエット -シュレスヴィヒ・ホルンシュタイン音楽祭にて

演奏：シュレスヴィヒ・ホルンシュタイン音楽祭オーケストラ
DLVC-1222 ¥4,830（税込） カラー／ステレオ／約89分

2011年2月25日発売 ドキュメント

●若者のすべて -究極のハーモニーを求めて ※LD既発

演奏：シュレスヴィヒ・ホルンシュタイン音楽祭オーケストラ
DLVC-1223 ¥5,460（税込） カラー／ステレオ／約116分